慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会改良と人性論
Sub Title	
Author	島田, 久吉
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.2 (1926. 2) ,p.235(95)- 256(116)
JaLC DOI	10.14991/001.19260201-0095
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260201-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的に經營し得らるゝように改良することが、最先の急務であると信ずるのである。

社會改良と人性論

島田久吉

（一）

社會改良の企圖に對する批判の基礎を人性論に置くは往々陳腐として排斥せらるる處である。殊に最近社會諸學問に於ける、識認論的研究の旺盛は自然科學に對して社會科學の成立を云爲する結果、人性論の如き漠然たる先驗的或は直觀的論議を過去のものとして葬り去らんとしてゐる。古代中世近世を通じて社會に對して何等かの討究を加へ何等かの思想を發表したものは、皆等しく人性に關する彼等の立場を明にして其の學說をそれより演繹したものであつた。換言すれば彼等は人性論より出發して其の學說を構成したものである。上はアリストートル、シセロ、アウガスチンより下はホッブス、ロック、スミスに至る迄、少しく社會思想史に目を觸れたものは、明示と默示とを不問ず等しく彼等の論議の背後に人性論の潛んでゐるのを發見するであらう。史觀としての科學的社會主義は暫く措き、所謂理想的社會主義或は社會改良主義、更に無政府主義と雖も、其の前提として人性に對する何等かの定義を思はしむるを否む事は出來ない。然るに近頃、共產主義又は無政府主義に對して批評を加ふるものは其の批評の基礎として人性論を採ることを意識的に回避せんとする傾向がある。併し乍ら率直に考へて、それ等の企圖に對する人性論的批評が一顧の價値なき程無力

なものであるか否かは問題である。人性論は已に何世紀間も論じ爭はれたる問題である。然共、單に舊きが故に之を採らざるのは當らない。或は古き問題なるが故に却つて價値を藏するものではなからうか。强制組織としての國家存續問題或は何等かの形式に於ける社會の强制に關する諸問題、又は經濟組織變革の問題即ち、共産若しくは集産に關する諸問題を人性論を離れて思惟するは遠きを望んで近きを思はざる弊が伴ふやうに思はれる。社會改良の理想的企圖と其の現實的結果との矛盾の悲哀は到る處其の例に乏しくない。而して是等の失敗に對する檢討が總ての論理的粉飾を洗ひ落した時、我々の慨嘆は無意識の中に人性論の素地を顯すものではなからうか。勿論、社會學心理學の發達は簡單なる第一原理より人性を決定し之の上に社會理論を構成するが如き方法を許容しなくなつた。『吾人は昔の思想家の單純性に信用を置くことは出來ない。吾人はベンタムやヘーゲル、ルーソーやマルクスの世界とは異つたる世界に住するのである。如何なる社會理論と雖、複雜性を回避する時は、そは却つて其の綜合せんとする事實に忠なるものでない。』（略萃 A Grammar of Politics, by H. J. Laski, p. 15）けれども、然かも、人性に何かの本然性を付せずして吾人は社會國家に關する考察を開始することは出來ない。（ibid. p. 17—參照）『現今に於て、殆ど凡ての政治學徒は制度の研究に忙しく人間の考察を回避した。尤も、進化論創說以後心理學者の人性研究は著しき發達を見たけれども、其の研究は何等、政治學に對して影響を及ぼし或は政治學の影響を受くることなくして進んだ』に對して。ウオラスは『政治學と人性論とを分離する傾向は單に一時的の思想であつて已に終末に至らんとする兆候の見ゆる』ことを述べてゐる。（G. Wallas, Human Nature in Politics, p. 14 15.）

吾人は本小篇に於て社會科學の基礎としての人性論一般を討究せんとするものではない。又、社會思想史上に於ける人性論の發展を見んとするものではない。只已に忘れられんとした人性論の殊に樂觀悲觀兩說を追想し、且つそれが今猶社會思想家の學究的修辭の背後にあつて隱れたるも然かも有力なる力なることに意を惹かんとするに過ぎない。

（二）

我々は思想史に於て常に同一問題に關して二の相反する思想が互に逆流してゐるのを發見する。唯心論に對する唯物論の如き即ち之である。人性問題に關しても亦之の例に洩るものでない。樂觀說悲觀說即ち之に外ならぬ。

社會科學は人間の科學 Science of Man である。故に社會科學に於ては其の思惟の對象は人間でなくてはならぬ。故に社會科學の成立は吾人の思惟の對象が自然界より移つて、吾人の自己に向けらるるに始まる。然るに、凡そ思索の發達を考ふるに、先づ宇宙の客觀的物象に對する驚異に其の端を發し、人間自己の內省的考察は之に遲れるのが常であつた。古代希臘に於てもイオニヤ哲學者間にあつては思索の對象は常に自然現象に局限せられ人間の適當なる研究なる人間を其の對象とすることはなかつたのである。然るに希臘智識生活の焦點が雅典に移ると、天體の運行に魂を奪はれて溝中に墜落した『大哲學者』に對する『爾の足が地上に存する限り天上のことを思ふな』との老婆子の忠告は一般の自覺となり、思惟の對象としての大宇宙は人間なる小宇宙に其の地位を讓つた。斯く

てソクラテスは其の不可知論によつて自然の問題は人知の窺及を越へ、之を解決せんとするは無益の業であつて、當に探求すべき唯一の問題は倫理生活の夫れなる事を敎へた。誠に『爾自身を知れ』と云ふ箴言は社會科學の濫觴であつた。支那に於ても其の最古の文獻と稱せらるる易に現はれたる處を以て見るに其の觀察は主として宇宙の形質例へば日月の運行、四時の循環、陰陽の消長等の上にあつて、人生の問題としては之を人間の上に類推するに過ぎなかつたのである。孔子に至つては其の考察稍々内省的であつて宇宙の物象に注げる目を轉じて專ら人間自身の上に向ひ修身治國の倫理問題を明にせんとしたけれ共其の秘奥に潛める人性問題に關しては『性近也』（論語。陽貨篇第十七）との片言を發見する許りである。彼が樂觀悲觀何れに贊したかは暫く判定することを得ない。然共、孟子に至つては斷然性善論を主張し其の人性論の上に彼が倫理學を樹立した。彼は『人學ぶは其の性善なればなり』『人今其の性は善（其の惡なるは）將た其の性を失喪するが故なり』となし人性を以て善となし其の屢々惡なるは放心の爲に其の本性を喪失するが爲なりと做した。『孟子曰く。人皆忍びざるの心あり。（中略）人皆忍びざるの心ありと謂ふ所以は今人乍ち孺子の將に井に入らんとするを見れば皆怵惕惻隱の心あらしむ。交を孺子の父母に内るる所以に非るなり。譽を鄉黨朋友に要むる所以に非るなり。その聲を惡んで然るに非るなり。是に由りて是を觀れば惻隱の心なきは人に非るなり。』云云（孟子。公孫丑章句上）即ち彼は一切の効利的思慮を離れたる惻隱の人性の奥に潛むるを感得したのである。之に反して、斷乎として性惡論を高唱せるものは是を荀子の所說に發見

り。是に順ふ、故に爭奪生じ辭讓亡ぶ。生れながらにして疾惡することあり。是に順ふ。故に殘賊生じて忠信亡ぶ。生れながらにして耳目の欲ありて聲色を好むことあり。是に順ふ。故に淫亂生じて禮義文理亡ぶ。然らば即ち人の性に從り人の情に順へば必ず爭奪出でて犯分亂理に合して暴に歸す。故に必ず將に師法の化禮義の道ありて然る後辭讓出て文理に合し治に歸せんとす。此を用て之を觀るに然らば即ち人の性惡なること明なり。其の善なるものは僞なり。』（荀子。性惡篇）又曰く。『今人の性は惡なり。必ず師法を待つて然る後正しく禮義を得て然る後治まらんとす。今人師法なければ則ち隱險にして正しからず。禮義なければ則ち悖亂して治まらず。古は聖人、人の性惡なるが以に以爲へらく偏險にして正しからず。悖亂にして治まらず。是を以て是が爲に禮義を起し法度を制し以て人の情性を矯飾して之を正し以て人の情性を擾化して之を導けり。皆治に出で道に合せしめんとせし者なり。今の人師法に化し文學を積み禮義に道るものを君子と爲し性情を從にし恣睡に安んじて禮義に違ふ者を小人となす。以之觀之に然らば即ち人の性惡なること明なり。其の善なるものは僞なり』。（同篇）

寔に彼に隨へば『師法の化、禮義の道』なければ人は其の本性の自然に隨つて『爭奪淫亂』の狀態を現出し社會は『犯分亂理』に合して『暴に歸』せざるを得ないのである。蓋し人は生れながらにして、『利を好むこと』と『疾惡すること』あるからである。彼は利己及び疾惡を以て人の二大性情なりと觀じた。而して僅に此の性情の自然を發揮せしめざるものは師法の化、禮義の道即ち法律及び因習である。法律及び因習の存せざる狀態は所謂る『自然の狀態』であつて、彼は此の『自然の狀態』をし

て暴に歸せしめた。『故に是が爲に君上の權を立てて以て之に臨み禮義を明にして之を化し法正を起して以て之を治め刑罰を重くして以て之を禁じ天下をして皆治に出でて善に合せしむ』るのである。（同篇）

政權、敎育、法律は元來性惡なる人類の救濟である。故に若し『今嘗試みに君上の勢を去り禮義の化を無くし法政の治を去り刑罰の禁を無くし倚ちて天下民人の相與するを見よ。是の如くならば則ち夫の彊者は弱を害して之を奪ひ衆者は寡を暴して之を譁し天下の悖亂して相亡ぶること頃を待たじ』（同篇）と。

政權を去り法律を廢し敎育を止めんか吾人は茲に自然の狀態を眼前に展開する。而して彼に隨へば自然の狀態に於ては彊者は弱者を害し多數は少數を暴して天下は立處に自滅して仕舞ふのである。荀子は人間を以て己を利し他を惡むものとなして人間に本然社會性のあることを否認した。君上の勢、禮義の化、法正の治、刑罰の禁なければ homme homini lupus にして自然の狀態は Bellum omnium contra omneis なるべく人生は nasty, brutish and short でなければならぬ。（T. Hobbes, Leviathan Pt. I. chap. XIII）

吾人は自然の狀態を以て各人が自由に其の欲する儘に行動する狀態なりと見る。（T. H. Green; Political Obligations 1917. p. 33.）之の狀態に於てのみ人が本然其の性に順つて行動するのを見る事が出來るのである。實に、『恐怖によつて法律に服ふ者は自由なる時は之を破らんとするものである。斯かる者に正直慈愛神聖を求むることの出來ないのは恰も強く鐵鎖に索かれたる猛虎に柔和溫順を求むる能はず、鞭下の狡猿を見て之に無邪氣靜直を望むこと能はざるが如きものである。』（Lord Shaftesbury, Virtues, Bk. I Pt. iii sect. 3）

人性の根底を支配する性情は愛なりや疾惡なりや。基督の全敎示の背後には完全なる人間調和の思想が横つてゐる。神の國は何れの時來たるかとパリサイの人に問はれればイエス答へて言ひけるは神の國は顯はれ來るものに非ず。此に見よ彼に視よと人の言ふべきものにも非ず。夫れ神の國は爾曹の衷にありと。（路加傳。第十七章二十、二十一）全く、神の王國は個人の衷心に始まるものである。即ち個人を導いて共同生活を營ましむる精神である。神の王國は天上に於けると同じ樣に地上にも招來すべきものである。イスラエルを嘆きたる主イエスは　母鷄の雛を翼の下に集むるが如く我れなんぢらの赤子を集めんとなせしこと幾回ぞやと叫けんだ。（路加傳第十三章三十四）イエスは正に同胞の觀念を擴めんとなせしこと幾回ぞやと叫けんだ。（路加傳第十三章三十四）イエスである。或人イエスに曰けるは爾の母と兄弟なんぢに物曰はんとするものは彼にとつては兄弟に答へて曰ひけるは我が母は誰ぞ我が兄弟は誰ぞや手を伸べ其の弟子を指して云ひけるは是れ我が母我が兄弟なり。蓋はすべて我が天に在す父の旨を行ふ者は是れ我が兄弟我が姉妹我が母なればなりと。（馬太傳。第十二章四十七―五十）

人性の根本を以て愛なりとすれば、詩人ポープの歌つた樣に自然の狀態は神の御世であるかも知れぬ。（Essay on Man, III. 148.）愛のみを以て結合せる社會には悖亂を前提とする强制は其の存在の理由がないであらう。沙翁歌ひて曰く

"No occupation; all men idle, all;
and woman, too, but innocent and pure;
No Sovereignty" (Tempest, act. II sc. I.)

と。

シアフツベリは人間の感情を自然的愛情、自己愛情、及び不自然愛情に分けた。第一の愛情は吾人をして自己を離れて全隣人の共益を圖らしむる大宗たるものである。第二の愛情は單に自己の利益を計る性情を指せるものであつて、不自然愛情とは單に有害に過ぎざる愛情を呼ぶのである。而して彼は此の最後の感情を除却し其の他の兩愛情間に正當なる一致をつくるは倫理學者の問題なることを論じた。彼は又、吾人は假令へ特殊の人を愛することあるべしと雖も、其の種族全部を好むものでないとの非難に答へて、特に或る個人を愛するには先づ第一必然人類其のものの友人でなくてはならぬと云ふ事を述べてゐる。而して彼は人性を以て神的造作なる事を主張した。(Shaftesbury ibid. Pt. II. sect. 2. Sir. L. Stephen; History of English Thought in the Eighteenth Century, 3rd ed. vol. II. ch. IX 參照)

自然の本質を以て調和なりと觀じ而して人間を以て自然の作業と見做すものは人事に於ても自然に於けると同じ樣に調和の支配を認むるは當然である。然らば人類の產社たる自然は這般の本質を有するものであらうか。ベルナール、ド、マンデヴヰーユに隨へば『自然は吾人の貧弱なる理知にとつては全然測知し難きものである。或る意味に於て自然は生物を此の世に接息せしむべく創造したと見做すことが出來るけれ共、しかも自然の所業は(吾人人類をも含んで)其の如何なる部分と雖も吾人にとつては侵入すべからざる祕密であつて、吾人の全詮索を避脫するものである。自然は互に相食んで全くべく生物を創造した。生の消費、殘虐、貪濫、肉慾も自然が不可思議の一部である。抽象的に考へる時は自然の所作の全部は等しく超然 indifferent たるものである。殘虐とか邪惡とか云ふ言語は吾人の感じについてのみ言はるべきものである。自然は全く暗黑の力であつて其の所業は單に事實に依つてのみ推定し得べく企圖、調和、秩序等の樣な先驗的學說によつて推定してはならぬ。吾人は吾人の情慾、衿持、肉慾、殘虐が眼前の社會を構成し文明國家の複雜なる組織を釀成するに大なる動力であり且ありつつあるのを見る。吾人は之を如實に見るが故にのみ之を知るのである。更に又吾人が妍爛たる粉飾の下に這般の動機を隱蔽した處で依然として大なる動力であることを否めない。』(Fable of the Bees, p. 441. L. Stephen, op. cit. p 39)

吾人は玆に於て十八世紀の人性問題に關する最も興味ある論爭を檢討せんとするものではない。只、自然と云ふ觀念に與へる內容の相違するによつて吾人の人性の觀察に甚しい懸致のあるのを認むるを以て止る。

孟子の同時代人に告子と云ふ人があつた。性に善惡なしとの說を說いたと傳へられてゐる。即ち孟子の傳へる處に據れば、(孟子、告子章上)彼曰く。『性は猶、杞柳の如く義は猶桮棬のごとし、人の性を以て仁義となすは杞柳を以て桮棬と爲るが如し』と、又曰く。『性は猶、湍水のごときなり。之を東方に決すれば則ち東に流れ之を西方に決すれば則ち西に流る。人性の善、不善を分つこと無き

や猶水の東西を分つこと莫きがごとし』と、則ち彼は人性は本來善惡なく之を決定するは偏に外部的誘導に依るものであると說いた。

（三）

ウヰリアム、モーリスの『無可有鄕』とトマス、ホッブスの『自然の狀態』を併讀するものは何人も其の說述せられたる狀態の餘りに隔絕せるのに驚嘆しないものはないであらう。制度の廢止は一に於て美と德の國土を現出し他に於ては醜と惡の國土を展開する。一は吾人をして天國に翺翔せしめ他は吾人を引きて畜生道に墮さしむ。如何なる思想と雖も斯の如く相懸絕せるものはない。而して兩者をして斯の如き霄壤の差を生せしむるのは實に彼等が人性に對する根本的觀察の差違である。凡ゆる社會學的企圖は人性に與ふる假定的本性から出發する。斯くて吾人は社會學說の根底に明示と默示とを不問ず人性論の潛めるのを見るのである。例へば十八世紀の哲學は樂觀論、原始的自由及び自然法の信者であつた。即ち社會行爲は自然法によつて支配せられ、若し現存の制度の弊害にして參入せざらんか、自然法は人を導いて幸福に到らしむるを敎へたのである。ルーソーは自然の手より來るものは總て善なることを言ひチュルゴーは人は本然善良なる事を主張し、ケネーは自然の支配の上に其の Physiocratie の學說を建設し凡ての人爲的、獨斷的制度の廢止によつて自然法の國土を再興し得べしと做した。(Miraglia, Comparative Legal Philosophy p. 344)フキジオクラートの自然法の觀念の根底には自然社會の思想の存するは明である。フキジオクラシーを以て自然秩序の學Physiocratie なりしかばデュポンドームスール氏は『我々の間に於ける凡ての思想に先立つて一の自然社會なるものがある。（中略）而して最も完全なる社會組織の此等の明確な原則は吾人に啓示せらるるのである。吾人は單に敎養學識ある人々にのみ啓示せらるるを云ふと欲しない。自然の手より生ずる單純にして無智なる人々にすら之は啓示せらるるのである。』となした。全くジード敎授の言の通り(Gide et Rist, Histoire des Doctrines économique depuis les Physiocrates à nos jour, ed. 1920 p. 7—)フキジオクラートの大系の本質的思想は自然の秩序であつて、所謂 le bon sauvage は彼等が人性に與へたる見解であつた。アダム、スミスは我々は本然先づ主として我自身のことに關心するものなりとなし(Moral Sentiment. ed. 1759 p. 181)從つて他人に關することより直接我自身に關することにより深大な利害を感ずるものであるとした。而して我々が單に我々自身の利得を欲しつつある間に幸にも見えざる手の導きに依つて、我々の意途に非る目的を增進するに到るものと考へて彼が放任經濟學說の大系を樹立したのである。(J. Bonar, Philosophy and Political Economy, p. 162 參照)フキジオクラートが現存の社會を以て自然法に背戾せるものと見做し再び之を自然の秩序の治下に置かんとなしたに反して、スミスは現存の社會に却つて自然法の支配を看取したのである。此の點に於て兩者の觀察は甚しく相違してゐるけれ共、彼等が共に自然及び人性に對する假定から出發してゐる點は聊も變る處はないのである。

政治學上に於ける極端なる樂觀論は無政府主義學說の父祖と稱せられてゐるウヰリアム、ゴッドウヰンの言說を引用するのが便利である。個人の幸福を以て總ての社會制度の目的だと解した彼は、政治が斯る目的に役立つは偏へに若干少數人の過誤若しくは迷行によつて何等かの支配が必要となな

るに至つた爲であると唱へた。而して是の過誤並に迷行は吾人の意志より出でたものでなくつて吾人の弱小及び無智より生じたものである。故に吾人の弱小及び無智が消滅する時は國家は正に其の大往生の境に入るのである。(Political Justice, vol. I. p. 238) 彼は支配を以て若干小數者の過誤並に迷行に歸せしめ更に過誤及び迷行を以て人間の意志に歸せしめずして弱小並に無智に歸せしめた。弱小及び無智は吾人の努力によりて除く事が出來るのである。吾人が弱小及び無智を脱する時吾人は完全なる社會に住するのである。蓋し人間各自は强制的制限の干渉を蒙らなくとも各自自身を律するに足る賢明を有してゐるからである。かるが故に政治は其の最善の狀態に於てすら惡たるを免れない。(ibid. p. 246) と。

政權の必要は單に若干少數者の過誤及び迷行あるに起因するものであらうか。更に人は外部よりの支配なくして自ら律する程しかく賢明なものであらうか。或は賢明になり得るものであらうか。之等の疑問の對する肯定的解答は軈て無政府主義學說の出發點でなくてはならない。

ブルドーンに隨へば人はアリストートルの斷定の如く本來社會的傾向を有するものである。而して此の社會性は理智の發達の楷段に相當する三段に具顯するのである。第一は同情或は憐憫である。即ち各自自身に類似する者と云ふ考慮によつて各自內に目覺むる『一種の磁石』である。第二は正義である。即ち自己と他人との間に於ける平等性の認識之である。第三は社會的衡平(Equité)である。之は各人間に於ける力量、熟練若しくは勇氣の相違より生ずるものであつて優者の寬大及び自己犧牲並に劣者の優者に與ふる感謝名譽に具現するものである。總てのかかる楷段並に種類の社會的本能は合理的社會に缺く可からざるものである。然るに實際に於て正義は人間生活より除却せられてゐる。之即ち私有財產制度の存する爲であつて、更に私有財產制度は主として政府の存するが爲である。と。(Qu'est-ce que la Propriété, I ier Mém. ch. V.)

各人は互に仇敵であつて而して暴君であると云ふホツブス、スチルナアの社會は全く無政府主義者の思惟し能はざる處である。彼等の眼底には人は本然相愛的社會的動物として映じ何等の反社會的性情を帶びないものである。社會及び個人は二の相關的觀念であつて一は他なくして存することは出來ない。寔にバクーニンの言葉の通り (Oeuvres, tome I. p. 298) 絕體孤獨の人は神と同じ樣に一の擬制に過ぎない。社會が個人に先ちて存し且又個人より後れて存すること猶自然の如きものである。人が『人』となり而して其の人間性の實現の意識に到達するは獨り社會に於てのみ之を爲すべく又獨り社會の協同によりてのみなさるるのである。人は協同的社會的勞作に依らずんば外界の軛より自分を解放する事は出來ない。協同の勞作のみよく地上をして人性の發展に多幸なる安住境たらしむることが出來るのである。(ibid. p. 277)

人性を樂觀する者はかゝる言說を天啓の妙諦と感ずるであらう。然しながら少しく人性に對して冷靜なる觀察を加ふるものは地上をして安住境たらしむる協同の勞作にも何等かの强制的組織を必要と認めはしなからうか。

（四）

總ての社會的企圖の裏に人性論のひそめるを見たる吾人の胸中には種々なる疑問の去來するを禁

するを得ない。

若し假に、人性を以て本然、社會的、相愛的なるものとなし、而して其の心の欲する所に從ひて矩を踰えざるものとすればあらゆる外部的强制は其の要莫かるべく、そは單に吾人の自由發達を阻害する桎梏に過ぎないであらう。故に該制度の破棄は斯る障害を除き人性をして圓滿に其の美を濟さしめ、至上の幸福の樂土は直に地上に現はるべきである。若し又假に人性を以て本然社會的なりとするも、次第に生じたる人爲的制度の爲に撓屈せられ、其の本性を離れて反社會性を帶び來れるものとなさば制度の破棄は又再び自然の境界を生じ自然無礙の境界は又、人性を解放して其の本然に歸らしめ理想社會に到達する日は遠くはないであらう。斯る樂觀的人性論は軈て無政府主義、共產主義に其の道を示すものである。

獨がへつて又、若し人性を以て本然反社會性なりとするも、理想的制度の下に於ては反社會性を脫却せしめて社會性ならしむるを得とせば、理想社會の建設は是亦難しとしない。然かれ共、絕體的『經濟人』が單に經濟學上の擬制に過ぎざるが如く、絕體的『正德人』或は『邪惡人』は現實の世界に其の對照を有するものでない。然らば人性を以て社會性並に反社會性を二つながら含むものとし、現今の制度を以て徒に社會性を薄稀ならしめて、反社會性を助長せしむるものとなし、若し更ふるに他の制度を以てすれば反社會性を脫却せしめて社會性を助長し得るものと做さば、是れ又、理想社會の出現を望む可からず云ふことは出來ない。文武興れば則ち民、善を好み、幽厲興れば則ち民暴を好む云々。（孟子。告子章句上）斯る所說は社會改善主義に其の扉を開くものである。

然れども、斯くの如く人性と制度を對立せしむるは、這個の命題の秘奧に藏せられたる問題を回避するものである。蓋し人性が制度を生せしめしや、制度が人性を變轉せしむるやの問題を解決することなくしては以上の問題に明白なる解答を與へる事は出來ないからである。今暫く人性を以て制度の原動力なりとせば、制度の變改によりて人性を變改せんとするは恰も父母未生以前に本來の面目を探求せんとするが如きものである。母鷄及び鷄卵の問題は吾人の屢惱まさるる處であるが、這次の問題に於ては人性に先立ちて制度の存せしは論理上思考し得ざる處である。然らば『始源の制度』は人性の趨く所に從ひて生じたとなして差支へないであらう。斯くして、人性の自然に從ひて生ぜる『始源の制度』より現今に至る制度の發展は是を人性の漸次的表現なりと見るべきか。或は『人間發達の順序は凡ての方面に於て主として、人類の理知的信念の進歩順序即ち人類の思想の遞續的變更の法則の上に歸存す』（ジョン、スチュアート、ミル）と見る可きか。或は又最初の制度以降制度と人性は其の地位を顚倒し、制度の創始者たる人性は遂に制度の奴隸たるに至り、而して制度の發展は獨立の自的發展であつて人性は單に其の發展に伴ひて從的發展をなせしものであるか。更に又人性は吾人の內的努力によりて、變改し得るものであるか。將に又人性は獨り、外部的自然力によりてのみ變化し得るものであるか。制度は一度び樹立せられたる後は人間の意志より獨立し外的自然力の一と思考すべきものであるか。そは recall を許さざるものなりや。這般の疑問を揭げたる吾人は敢て唯心論、唯物論、自由意志論、宿命論の難關に入らんとするものではない。只だ社會學的檢討よりして、社會的企圖に入らんとするものは常に此の疑問に對する解答を用意しなければな

らないと信ずるからである。

物質生活に於ける生産の方法は一般、社會的、政治的及び精神的進化を條件づく。Die Produktionsweise des materiallen Lebens bedingt den sozialen, politischen und geistigen Lebensprocess überhaupt. (Zur Kritik der Politischen Oekonomie, 1859 pp, IV. V)となせるカール・マルクスの學說は明に精神生活を以て從的發展と見做した。經濟的進展は社會的進展を決定す。然らば精神的進化は社會的進化に毫も關與することは莫いのである。經濟は人間生活の一部である。物質生活の當初に於て、人は自己の本性に最も反する方法に於て、經濟過程を採つたと推量することは出來ない。然らば物質生活も亦人性の自然に隨ひて生じたのは明である。然るに物質生活なる一形式が其の主體たる人間を離れて、夫れ自體の存在を有し、夫れ自體の發展をなすものであらうか。彼に隨へば吾人の精神生活は物質生活の倒影に過ぎない。されば私有的思想も、共有的思想もこれを本然と言ふ事は出來ないのである。唯、私有的生産の方法は私有思想を生じ共有的生産の方法は共産思想を招來する。meus と tuus との分離は實に罪惡の始源なるべしと雖も、然かも mine と thine を生じたるは吾人の人性を離れたる單なる偶然として許容すべきや。若しくは歷史的過程に於ける人性の發展の結果と見る可きや否や。

先驗的議論に疲れたるものは原始時代の史實に彼等の論據を求めんとした。然共吾人は玆に Labock, Maclennan, Bachfohen, Morgan. 氏等の說述を檢討せんとするものではない。只、上古に於て假令へ共産制度が行はれたりとするも、それが現今の私有制度に移推せる過程に於て、吾人の人性は何等の役目も演ぜざりしか否かの疑問を繰り返すに止める。

寔に歷史の發展を以て單に理知の發展と見做すことは出來ないけれ共、吾人の本能及び理性は歷史的發展に全く不關的存在であるとすることは出來ぬ。

吾人の本質的欲望が吾人の生活樣式を支配するは何人も否定すべからざる處である。然らば吾人の本質的欲望は利己を先とすべきや利他を先とすべきや。吾人の欲望は其の形相に於て或は其の岐末に於て向上せしむるを得べしとするも、其の本質に於て、其の大宗に於て不變なりや否や。吾人の私有欲は本質不變の欲望に非る莫きか。或はかかる疑問すら其の觀念は是亦、私有制度の單なる思想的倒影として已に運命づけられしものなりや。

或は人間の行動は欲望によりて左右せらるること少く衝動によりて多く左右せらるるものなりとするも、(B. Russell; Principles of Social Reconstruction ch. I.) 人類の衝動は欲望に於けると等しく同一傾向を有するものであるから、人類の社會活動は是れ又、社會衝動の發展と見る事が出來る。而してラッセル氏は衝動を分ちて創造衝動と所有衝動とし、過去及び現今は所有衝動の猛威を逞せる社會にして、將に來るべき社會は創造衝動の偉力を發揮すべき夫れなりとなした。然れども兩者の區別はしかく判然たるものであらうか。換言すれば創造衝動中には何等所有的意味を抱含せざるものなりや。智識、藝術に對する創造的衝動と雖も、何等抽象的『知識の所有』『藝術の所有』の衝動に助長或は制限せらるることなきや。單に無形及び有形を以て衝動の目的を論ずるは首肯し難い。所謂る創造的衝動に往々、衿持の伴ふは此の間の消息を語るものではないか。至高なる戀愛と雖も『魂の所有』に對する衝動に驅らるること莫きや。至純なる愛に出づる自己放棄と雖も、吾人の內心

に於て『美と德の所有』を以て其の空虛をふざぐこと莫くして絶大の法悦に合し得るものなりや。又假に絶體なる創造的衝動ありとするも、そは單に制度の變改によりて、所有衝動の上に君臨し得るものなりや。這般の疑問は依然として吾人の胸中を去らないのである。

所謂る創造的衝動が俚言に云ふ『身の內の財』となる時、吾人は吾人の人性に深き悲哀を感ぜざるを得ない。深き內省の缺除は吾人をして往々自ら美と德の所有者なりと思はしむるものである。假令へ近世の自然文學が徒に醜と惡の刳抉にのみ終始せりとは言へ、ゴルゴンの鏡は吾人をして深き內省の道を求めしむるものである。徒に醜と惡との地に蹐踢して美と德の天を望むものは往々溝中に落ちたる希臘老哲儒の覆轍を履まなくてはならぬ。

寔に社會主義を以て單に胃腑の問題（Adolf Shaeffe）と見做すことなく、人性の完全性を主張する學說を含むものとなす時（Alfred Marshall:—Principles of Economics, 1916 p. 763）そは吾人の人性が許容するより以上の關心を社會福利の爲に拂ふべきを要求する傾向を有すとなすロッシアーの評言（Adolf Held:—Sozialismus, Sozialdemokratie und Sozialpolitik p. 30）は吾人を引きて再び人性の暗黑なる塔中に立戻らしむるのである。

若し人性を以て千年貳千年の如き、其の母たる自然の恒久に比すれば一瞬の間に過ぎざる短時日に變換せられざるものと見る時、吾人は歷史的發展を以て、人性に bedingen せらるる事あるを認める事が出來る。蓋し『口の味に於けるや、眼の色に於けるや、耳の聲に於けるや、鼻の香に於けるや、四肢の安逸に於けるや性』（孟子盡心章下）にして、『今、思考することは曾て思考せられたること』（ゲーテ）なりとする時、洵に『歷史は吾人に何等新奇なることを語るものでないからである。』（ヒューム）暫く私有、及び支配、或は利己及び疾惡を以て愛と共に人性の秘奧に潛む力なりと觀じて單なる環境の變化も之を撓るに頗る微力なりと見る時、吾人は社會改良の企圖に關して異りたる見解を持たざるを得ないのである。善に出發せる企圖にして惡の結果を惹起する時、吾人は滑稽なる悲慘を味はなくてはならぬ。而して其の罪は吾人の無知獨り之を負ふべきものである。吾人は已に『汝自身を知れ』なる箴言が應て社會科學の濫觴たりしを述べた。蓋し幸福を企圖せざる知識は單に頭腦の遊戲にて社會的價値なく、社會科學に於ける幸福の企圖は本然、社會改善に集中せらるべく、社會改善の企圖は其の基礎を人間の研究に置かなくてはならぬ。ジアン・ボータン、モンテスキユー、バツクル等によりて述べられたる自然風物の吾人に爲す影響の學說は遂に人は環境の動物なりとの言葉を造り出したけれども、單なる制度の變革による失敗は他の方面よりして吾人に何物かを暗示するものではなからうか。

（五）

恰も自然文學が赤裸の人間を其の俎上に上せたると等しく、人間のみ獨り俎上に上す可からざるを敎へたるは進化論である。生物學者の前に於ては人は他の動物と相並んで俎上に登らざるを得ないのである。暗黑の塔の中に於て、自己の內心を凝視せる吾人は茲に窓を開いて自然界を見渡さなくてはならぬ。

春和平明百花妍を競ひ蝶舞ひ鳥囀ずる候にあたつては或は秋風颯爽、蜻蛉遙に飛び滿野唧々の聲

を聞く時は洵に吾人は自然を以て美と平和の搖籃たるを感せずにはゐられない。然らば吾人はポープと共に歌はんか。然れ共吾人の感覺が吾人の眼に美と平和とのみを訴ふるに不拘らず、吾人の理知は斯る境地にさへ猜疑の目を向く可きを命ずるのである。冷酷なる科學者の目に取つては花と雖も植物の繁殖器關と映じ鶯の囀るを聞くも其の雌を求むるものとして響くのである。美と平和の王國と感せられしものは實に『生めよ殖へよ地に滿てよ』の命を受けたる國土である。然らば生みて殖えて地に滿つるの道は愛の道によるものであるか、愛なき道によるものであるか。茲に至りても吾人はこの相反する見解の存するに遭遇せざるを得ない。則ち一は生存競爭說にして他は相互扶助說である。

『魚は本然泳游の命を受け而して大魚は小魚を呑む然らば魚の水を得、大魚の小鮮を呑むは至高の自然の權利によるもの』(Spinoza, Tract. Theologica-Politicus p. 252) ものなりや。吾人は茲に生存競爭並に相互扶助を以て其の何れが多く進化の要因たりやを問題にするものに非ず只其の何れが多く自然の體樣なるかを知らんと欲するに過ぎない。トマス、ヘンリー、ハックスレー教授に隨へば倫理學者の見解を以てすれば動物世界に恰も劍闘士の演技と同じき水準にあり。(中略)而して動物界と等しく原始人にありても、生活は不斷の自由闘爭にして、僅に一時的の家族關係を除き、ホッブスの所謂る全ての全てに對する戰爭は一般の生活態樣なりと。(Nineteenth Century, 1888 Feb. p. 165) 然るにクロポトキンの說述する處にまれば、社會性は非常に多くの猛鳥の共通の性質とせられる。最も孤獨なる猛者の一なるブラックバードの鳴は最も社交的なる鳥である。其の鳴聲闘はダーウキン

及其の他の博物學者の記述する處であつて彼が大に失する獲物を捕獲する場合には五六の「朋友」と相率ひて是を撤去するの事實がある。然して繁忙なる一日の過ぎて彼等が夜の休息に樹林、藪鶯に赴くや常に相寄り時によれば十哩以上の遠距離よりしてすら相集る事がある。(Mutual Aid: Popul. ed. p. 13) 彼は又下等動物より高等動物に至る動物の社交性につき豐富なる例證を揭げてゐる、食肉動物中に於て、社會より孤獨を好む者は獅子、虎、豹の等の如き猫屬のみにして狼の如きは常に相將ひて餌物を狩るものである。茲に至れば　Homo Hommini lupus　なる意味は反對の意味を持つ事となる。トマスホッブス恐らくは地下に於て苦笑するであらう。

吾人は斯る相異なれる見解よりして人性に何等の斷案を下す事は出來ない。只社會性が人性の大本なるが明なると等しく非社會性の存するは是亦疑ふ可きでない。只非社會性は吾人の心的努力により或は環境の變化により之を除却し得べきや。或は非社會性も亦人性の本質にして遂に個人の幸福は其の一部を犧牲にする事莫くして憐人の幸福と兩立せざるものなりや。至高なる幸福の樂土は古代より吾人の腦裏に翔翔せる理想である。然共、至高なる幸福の樂土が同時に美と德の國土に合するの日は遠いであらう。吾人の理知の進練は吾人の幸福を隣人の幸福に發見する日あるべきも然かもそは個人の至高の幸福を去る事猶遠かるべきである。單に制度の變改によりて『全ての人が麪麭を有する迄は一人と雖も菓子を持つ可からず』との日來ることありとするも『一人と雖も菓子を持つに忍びず』との日來るべきや否や。

法律の目的は平和なりと。(Von Jhering:—Kamp ums Recht s. 1.) 然らば法律なくして平和は到達

せられざるものであらうか。吾人は猶相互に制することなくしては平和の國土に住せざるものなりや。法律なくしては吾人は相侵して以て悖亂に歸するものなりや。然れ共『嘗みに亂は何によりて起るかを察するに相愛せざるに起る』（墨子。兼愛上第十四）ものにして『故に天下兼ねて愛すれば則ち治り交々相惡めば則ち亂る』ものである。洵に古代より神の王國は吾人の心境を支配したる憧憬である。古代は是を過古に求め現代は是を將來に打建てんとす。而して吾人の求むべき世界は

The World that we must seek is a world in which the creative spirit is alive, in which life is adventure full of joy and hope, based upon the impulse to construct than upon the desire to retain what we possess or siege what is possessed by others. It must be a world in which affections have free play, in which love in purged of the instinct for domination, in which cruelty and envy have been dispelled by happiness and the unfettered development of all the institincts build up life and fill it with mental delights (B. Russell Road to Freedom p. 210) にして Then all mine and all thine shall be ours, (William Morris—The Day is Coming)

なるべきも、斯る世界は單にそを『創造せんとする人を待つ』のみであらうか。

『洵に高尚なる精神は理想的なる神の國を迎望する。そは各人が絶高の自己否定の點に到達し道德的完成のみを努力する狀態であつて國民間と等しく個人間も平和の支配に置かれ生存競爭は終末に告ぐるに至らう。人性が如何なる場合に於ても斯の如き理想狀態に達し若しくは斯る道へ眞摯に進み得るものなりやは茲に論ずる必要はない。只人類が未だ斯る狀態に到達すること遙に遠きは之を認めなくてはならぬ。』(Thomas Henry, Hiedey; Essays, ethical and political 1905. P. 10.)

グスタフ・カッセル「經濟學根本思想」の一節

高木壽一

一

ストックホルム大學教授グスタフ・カッセル氏が貨幣、金融、外國爲替の問題或は理論經濟學の諸問題に關し從來發表せる論文著書は殆ど枚擧に遑なく、經濟學界一方の雄たること夙に世人の認むる所なり。

カッセル教授の如き多數の著作を有する學者の勞作に接する者にとりては、之等の諸篇を通ずる根本思想を著者自らによりて敎示せらるるとは多大の便益となるものなり。茲にカッセル教授自らも自己の經濟學的諸研究に於て嚮導觀念となれる根本思想を說明するの責任あるを感ぜられたり。之がために著はされたるものは即ち Fundamental Thoughts in Economics (1925) なり。本書は章を分つこと四にして

Chapter I. Aims and Methods of Econonic Theory.
Chapter II. Economics as a Theory of Price.
Chapter III. The Principle of Scarcity and the Conception of Cost.
Chapter IV. The Scarcity Theory of Money.